第６回三重県の観光振興のあり方検討懇話会 概要

日　時：平成 23 年 9 月 5 日（月）13:30～15:40
場　所：アスト津４Ｆ 研修室Ａ

（議事内容）

これからの観光振興のあり方についての意見交換

（主な内容）

○ これまでの議論の積み重ねが結集されたものとなった。

○ 「観光資源」の定義の中に、「人材」を加えたことを評価している。人の重要性を伝えていきたい。いくら素晴らしい観光資源があったとしても、その地に住む人が、資源に誇りを持ち、観光客に対して「見てもらいたい！体験してもらいたい！」という気持ちが抱かないと駄目である。

○ 「観光資源」よりも、むしろ「人」が大切である。観光資源に乏しい地域でも、集客できている地域は、「人」の存在が大きい。

○ 様々な地域や業種の方々が、「観光」という視点でまとまることができた意義は大きい。今後のきっかけとしていくことが大事である。

○ 遷宮前後では、全く状況が異なる。持続することを考える必要がある。行事頼みの観光ではなく、地域の人々がどのように観光に携わるか、を改めて考えることにつながる。

○ 小さくて本当に良いものほど出てこない。周りを見ても、良い光を持っているにも関わらず、経済力、人脈の不足からチャンスを逃している。そこに手助けすることが、本県の観光の力となるのではないか。

○ 観光には、「第一主体（観光客）」、「第二主体（観光事業者）」、「第三主体（地域住民）」がある。

○ これまでは「観光客」と「観光事業者」が主体であり、観光とはプロが行うものであったが、今、大切なのは、観光を生業としていない「地域住民」である。「地域住民」が観光に携わることが、おもてなしや誘客に大きな影響を与える。今後、「地域住民」との関係を強くしていかなければならない。

○ 遷宮をきっかけとして、考えていることが２点ある。

○ １点目は、地域をプラス思考にもっていくこと。遷宮や熊野古道、高速道路開通等は強いインパクトがある。それらを生かし、プラスの方向へ変えていくための

施策を話し合う場づくりが必要である。

○ もう１点は、マイナスを深くしないこと。地域を守り、保存していくことは大変である。特に熊野地域は過疎地であり、携わっている人たちが高齢化している。守っていく仕組みを作ることが今後の課題である。

○ 初めての来訪では、人気スポットを希望する。初来訪の外国人の場合は、そのコースでよいかもしれないが、リピーターの満足度は向上しない。

○ だからこそ、「小さなものにも光をあてる」という話になるのだと思う。光のあて方により三重県観光を変えていきたい、という意見は理解できる。

○ 今後、戦略をどう打ち立てるかが重要である。具体性が必要である。掛け声、美辞麗句では結果は出ない。失敗することもあろうが、何に焦点をあてていくのか、具体性を持ったやり方を考えないといけない。

○ 細々としながらも活動を継続している組織がある。放っておくと、いつのまにか無くなってしまう。県には、これらの組織をまとめ、コラボレートする等、イニシアチブをとる役割が求められている。

○ 民間も「持続する」必要性は考えている。しかし、民間だけでは、「小さな光るもの」が消えてしまう。数年先は見るものの、10 年先は見ていないという現象が起こる。条例の基本理念である「観光産業の持続的かつ健全な発展」、持続的であり健全であるために、公の役割が必要となる。

○ 地域には、素晴らしい観光資源が多いものの、発信するには至っていない。地域連携により情報発信していく必要がある。この連携に対する支援を、行政には期待している。

○ かつての三重県観光は、伊勢志摩が中心であった。時代変遷とともに、県内各エリアに広がってきた。市町の多くが、観光振興プランを策定し専門部署も設置するようになってきた。県全体をどう盛り上げていくのか、これが条例の柱となる。

○ 条例や基本計画を策定するということは、今後、県の役割も大きくなるとともに、職員にもその意識を持って、しっかり取り組んでもらいたいということである。

○ 「地域の連携」、「資源の活用」、「人材の育成」、これらの背後に共通している問題意識は「顧客満足」である。顧客満足を明確に考えているという考え方が、基本計画の中に入るとよい。

以　上